

実力向上講座（硬筆）

上

（硬筆）

【最終回】「硬筆書写の基礎・基本とその応用」

—作品制作（散らし書き）について—

文教大学文学部講師
本誌編集委員
米本 美雪

◇はじめに

二年に亘る実力向上講座（硬筆）の連載も最終回となります。今回は、主に、本誌において毎年一回実施される硬筆段位認定試験の課題にもなる「漢字行書と調和する仮名」、および「漢字行書または草書と調和する仮名」の過去の課題を取り上げて、散らし書きの作品制作の方法について解説します。

■俳句を書く

「漢字行書と調和する仮名」（日本武道館指定硬筆用紙（高・大・一般用）を縦に使用）

課題語句一 「閑かさや岩にしみ入る蟬の声」

□作品制作の手順

①漢字行書の書き方を字典で調べる。

特に、「閑」はさまざまな書き方があるので、

書きやすい行書の書き方を選ぶ（図1参照）。

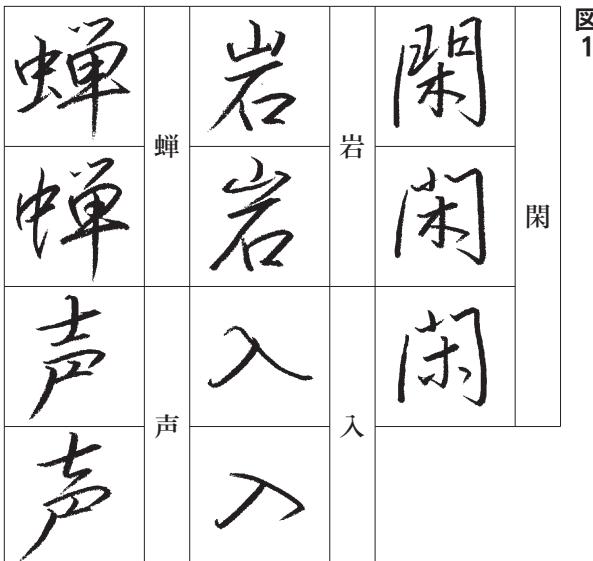


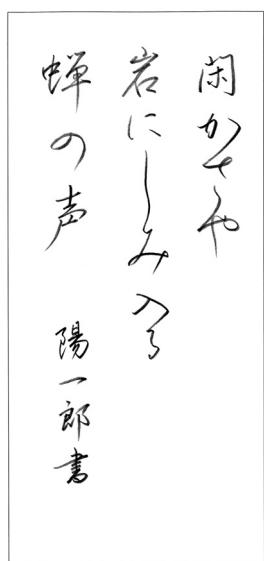
図1

- ②漢字や平仮名の基本的な運筆や字形を確認する（図2参照）。
- ③文字の大小や概形を工夫し、連綿する箇所を決めて流れを表現する（十三頁図3参照）。
- ④行脈が左に流れないように留意して書く（十
三頁図4参照）。



図2 △文字例

図3



①行書き例（行頭の文字の高さを揃え、行間を等間隔にする）

落款の配置例（行書き・散らし書き）

⑤落款（名に加え「書」や「書く」を記すこと）

を含めた配置を考える。

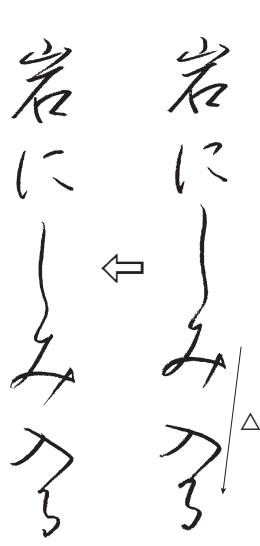
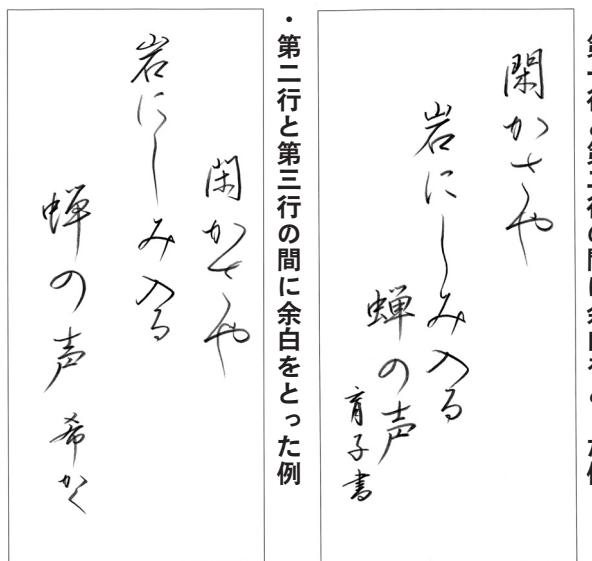


図4

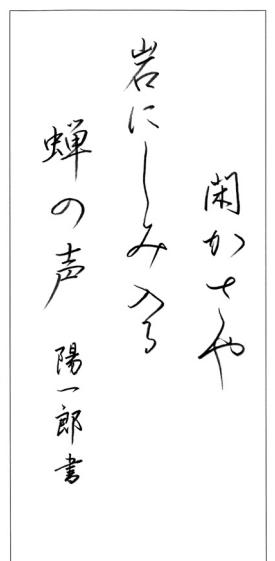


②散らし書き例

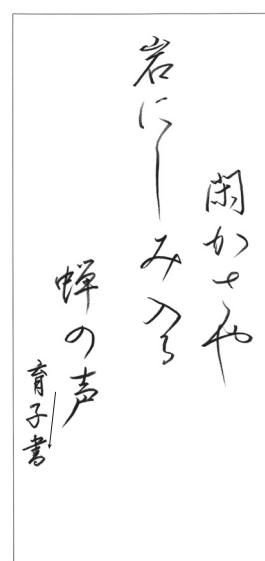
・行頭の文字の高さに変化をつけ行間を等間隔にした例



・第二行と第三行の間に余白をとった例

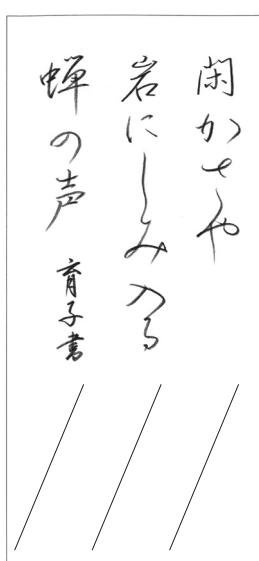


・第一行と第二行の間に余白をとった例



△落款が本文の流れに沿っておらず行脈が矢印の方向に流れている例

△落款の位置が上になりすぎている例



好ましくない落款例

△下部の余白が広すぎる例（①行書き例のように落款の位置を下部にすると安定する。また、「育子かく」とする方法がある）

※落款の書体は、課題が「漢字行書と調和する仮名」となっているため、草書で書かず行書で書くように留意する。

課題語句二 「山路来て何やらゆかしすみれ草」

図5

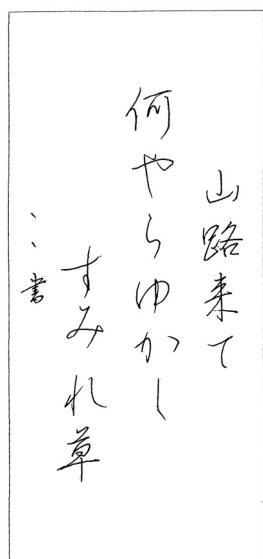


図5に記載の作品を、より変化のある作品にするにはどのように改善すればよいでしょうか。

課題語句一、十二～十三頁の「作品制作の手順③～⑤」の項目について考えてください。

□改善点のヒント

①「山路来て」の中で、小さく書くことができ
る文字や、概形をより縦長にできるのはどの
文字か。

②「ゆかし」の中で、概形をより縦長にできる
のはどの文字か。

③第一、二、三行の中で、流れを表現するには
どのようにすればよいか。

④第三行の行脈はどうか。

⑤落款の位置はどうか。

次に①～⑤についての改善点を示します。

□改善点

①「山」の高さを低く、字を小さくし、「て」

の概形をより縦長にする。

②「し」の概形をより縦長にする。

③第一行：「来」の最終画の終筆を次の「て」
に向けて払うように運筆する。

第二行：「かし」を連綿する（「やら」「らゆ」
「ゆか」などの連綿も可）。

第三行：「みれ」を連綿する（「すみ」の連
綿も可）。

④「草」の位置を少し右にずらし、行脈が左に
流れないようにする。
(短冊)

⑤落款は安定するように位置を下げて書き、本
文に沿うように配置する。

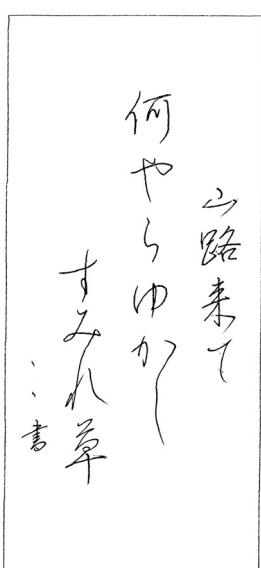
以上、①から⑤の手法を用いて改善した作品
が図6になります。表情豊かな流れのある作品

硬筆においては、毛筆の短冊の書き方（上三
分の一から書き始める）で書かなくとも構いま
せん。基本的には一行書きで、余白や文字の流
れに留意して書いてください。

これを踏まえて、十二～十三頁の「作品制作
の手順①～⑤」を行います。この課題語句は漢
字が多いため、漢字相互の大小について、次
のような工夫が必要となります。

□改善点のヒント
①「山路来て」の中で、流れを表現するには
どのようにすればよいか。
②「ゆかし」の中で、概形をより縦長にできる
のはどの文字か。
③第一、二、三行の中で、流れを表現するには
どのようにすればよいか。
④第三行の行脈はどうか。
⑤落款の位置はどうか。

図6



課題語句三 「夏風机上の白紙飛び尽くす」
(短冊)

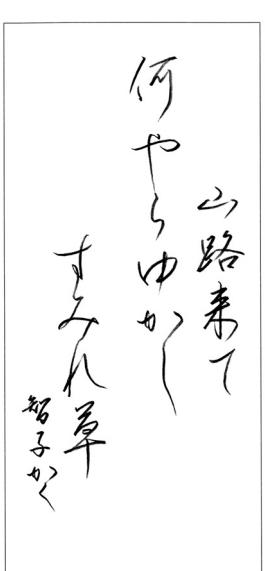


図7

①夏風（行頭の漢字は大きく書きすぎないよう
に留意する）

□工夫



△例



(口)机上 (基本的には画数の少ない漢字は小さく書くが、次のように概形を縦長にして大きく書くこともできる)

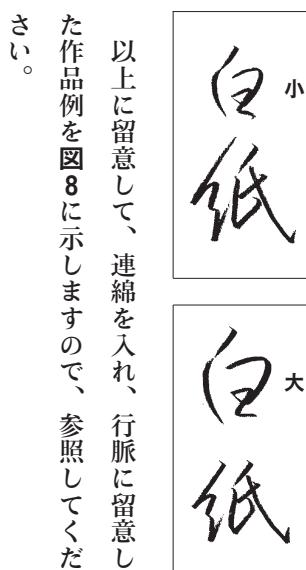


⑧「白紙」(「白」は小さく書くと調和する)

(7)行書や草書をどの漢字に使用するか、十四～十五頁の「課題語句三、工夫(イ～ハ)」で示したように、漢字の大きさに変化をつけて行書

や草書で書いてみる (図9参照)。

* 「吉野」を草書で (ちよの)と書いた場合は、「白雪」を楷書に近い行書 (白 雪)で書くと調和がとれないため、くずし方にも留意することが肝要である。



⑨「に」が三回使用されているため、字形を変化させたり、連綿を使用するなどの工夫をする。また、「に」と「け」の第一筆の方向を

以上に留意して、連綿を入れ、行脈に留意した作品例を図8に示しますので、参考してください。

変えるなどの工夫も必要である (本課題の「に」や、使用頻度が高い「の」のさまざまな書き方は図10参照のこと)。

図9



図10

の	に
の	に
の	に
の	に

図8 夏嵐机上の白紙飛び尽くす (サインペン「筆」(い)ち 使用)
「漢字行書または草書に調和する仮名」(日本武道館指定硬筆用紙(高・大・一般用)を縦に使用)

課題語句四 「み吉野は山もかすみて白雪のふりにし里に春は来にけり」

部分掲載・原寸大

この課題の場合は、十二～十三頁の「作品制作の手順①～⑤」に、次の項目⑥～⑨を加えます。

⑥漢字草書の書き方を字典で調べる。



⑨落款の書体については、本文の書体と同様、

または本文よりくずした書体で書く。

○ 本文・行書体 → 落款：行書体または草書体

△ 本文・草書体 → 落款：行書体

△ 本文・行書・草書体 → 落款：行書体

*「書」のくずし方も名前に調和させて書くよ

うに留意する（図11参照）。

図11 落款例

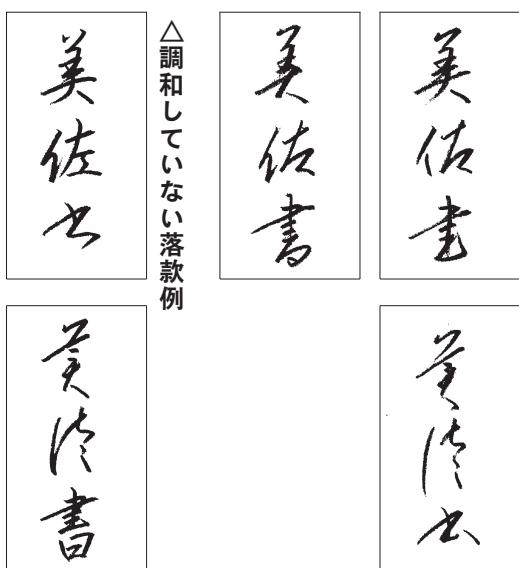
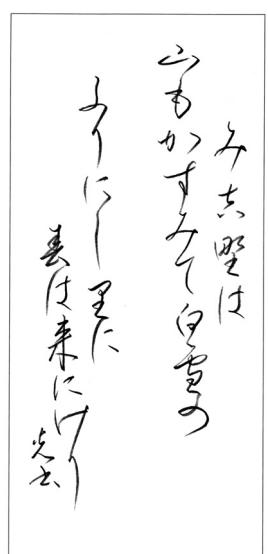


図12



■古筆の臨書から学ぶ

作品の表現の幅をより広げるために、鉛筆やサインペンを使用して古筆の臨書を試みるのも効果的です。流麗な運筆や全体構成を考える学習方法について高野切第三種を例に解説します。

第三種の書風は、軽快で明るく、線は単純化され、流れるような美しさがあります（図13 高野

切第三種部分参照）。この細やかな技法の特徴を得るために部分練習をします（図14 参照）。

部分練習後、図14の原本二行を文字や連綿線の配置を考え、五行に並び替えて臨書します（十七頁図15 参照）。さらに、行頭・行末の高さや字形に変化をつけて、独自の散らし書きを試み

ます（十七頁図16 参照）。

文字の配置や余白など、全体構成を試行錯誤して書くことは、毛筆においても、また硬筆においても、散らし書きの学習に役立ちます。毛筆作品を制作する場合も、このように硬筆用具を使用し、雛型を何通りか作成した上で取りかかるのも一つの方法であると考えます。

最後に、十七頁のまとめ問題に取り組んでみましょう。解答例を図17、18として掲載してお

りますので、ご参照ください。これをもちまして、本講座を終了いたします。

図14 部分臨書（サインペン「筆之助しつかり仕立て」使用）

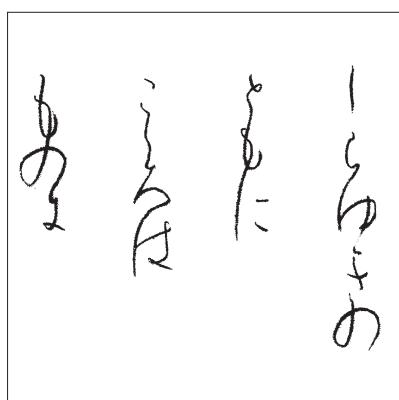


図13 高野切第三種（じらゆきのともにわがみはふりぬれどこころはさえぬものにぞありける）
可
支
爾

以上の点に留意して書いた作品例を図12に示しますので、参照してください。

なお、用紙を横に使用する場合も制作手順は同様です。誌面に限りがありますので割愛しますが、左部分の余白が狭くならないよう留意してください。

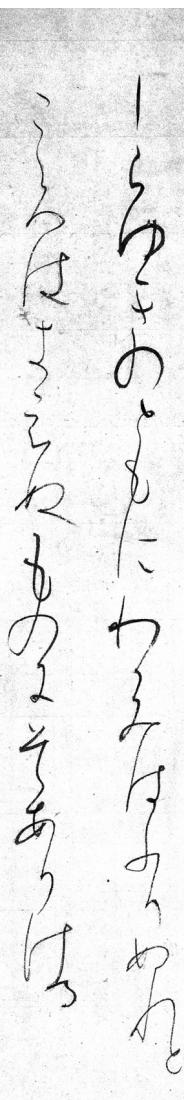


図15

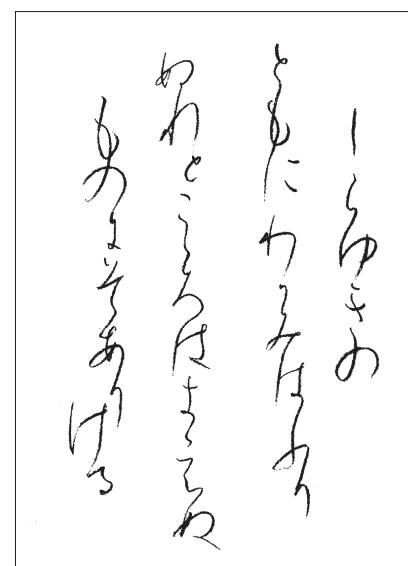
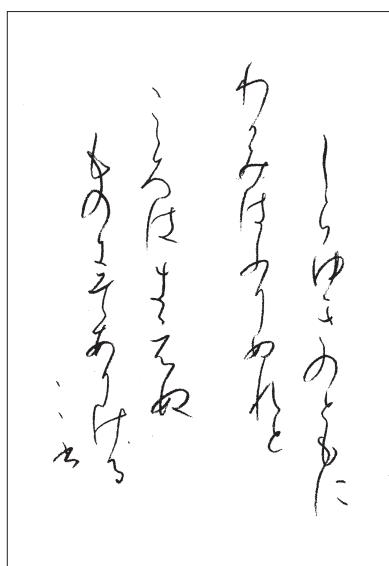


図16



■最後に

凛として咲く一輪の花に心を奪われたり、自分の存在を訴えかけるように健気に咲く路傍の花に、ふと心を奪われることがあります。古来より脈々と受け継がれている纖細な感性こそが、書を表現する上で最も大切な要素の一つである

と言つても過言ではありません。また、生け花の構成美や日本庭園の配置美・空間美に感動することも、書作品の文字の配置や構成、更には、余白の取り方などの感覚を養うことにつながります。

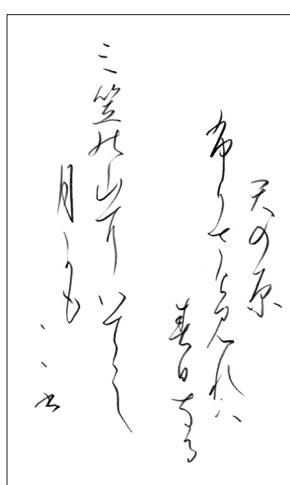
硬筆・毛筆とも書写書道は文字を素材にして美を表現する奥深い芸術です。悩み苦しみながらも書の美を追い求め、継続することこそ、真の意味があると考えます。人生を豊かにし、感性に磨きをかけ、探求する悦びに巡り合えるその時まで、共に学んでまいりましょう。

二年間に亘り、ご講読いただきありがとうございました。

—まとめ問題にチャレンジ—

次の和歌二首を硬筆用紙などに散らし書きしてみましょう。

- (1)天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも (安倍仲麿)
- (2)春すぎて夏きにけらし白妙のころもほすてふ天の香具山 (持統天皇)

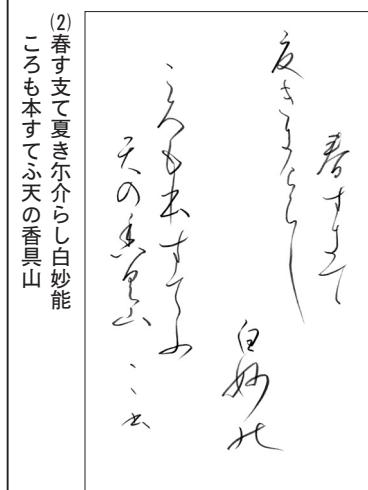
解答例
図17

(1)天の原ふりさけ見れば春日なる三笠能山耳いで之月可も

(2)春すぎて夏き尔介らし白妙能

ころも本すてふ天の香具山

図18



※『実力向上講座』令和五年一月号の補足

○十五頁「構」の草書体について
旁の「構」の草書体は、図1「溝」「講」の古典例（一部参照）に示した書き方がありますが、一般的な「構」の書き方を図2「構」の古典例（一部参照）に示しますので、参照してください。

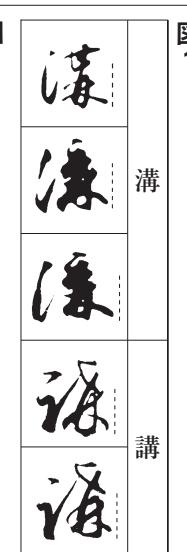


図2